

老舍『離婚』試論

渡辺武秀

On Lao shê (老舍)'s "Li Hun (離婚)"

Takehide WATANABE

概要

世界上有位“好管闲事”“长于照料”的先生。这个作品的主人公——张大哥就是这样的人的代表，所以可以叫“大家的大哥”。这样的人当然交际多了。交际一多，认识的人也就越来越多了。这个情况下，他用自己的关系帮助别人，给A介绍B，也给别人工作上、生活上给予帮助。

说起来，这个人当然是个好人，大家也都喜欢他。但他有他的缺点。他用自己的办法帮助别人时候，有时还会保护坏人，还可能姑息社会腐败。比如，杀人也没关系，张大哥有的是公安局的熟人，只要他言语一声，公安局就会放了杀人的。

作品里还有人——老李——看不惯象张大哥这种人以及他们构成的社会。却难免不受这种人和社会的影晌。

はじめに

この作品は、良友文学叢書の第8種として、上海良友復興図書印刷公司から1933年8月に出版された^(註1)。

作者は自らの創作体験を述べた「私はどのように離婚を書いたか」^(註2)という文章の中で、この作品は「ユーモアに帰る」ことを意図したと述べている^(註3)。

「ユーモア」と言えばすぐ『老張的哲学』(1926年)『趙子曰』(1927年)が想い起こされる。これらの作品は「ユーモア」作品と呼ばれることもあるが、これらの子細に読んでみると、ユーモラスな登場人物、例えば『老張的哲学』の趙おばさん、『趙子曰』の趙子曰の描き方には共通する特徴が見られる^(註4)。そしてさらに、この特徴はこれらの作品のみならず、引き続いて書かれた『二馬』(1929年)の主要な登場人物であるメアリーのような人物にも見られ^(註5)、これらの三つの作品に一貫するひとつの特徴ということもできるように思われる。

この特徴であるが、次の三つの点にまとめられる。

(1) 趙おばさん、趙子曰、メアリーはすべて「善人」である。決して心根は悪くない印象がある。この「善人」という印象がユーモラスな表現で、醸し出されている。

(2) それぞれの作品ではこれらの登場人物達の考え方が問題にされるのだが、彼らは自分の考えを疑うことはない。絶対正しいと思っている。そうして、彼らは自信たっぷりに社会の中でいきいきと生きている。これがまた誇張を加え「ユーモラス」に描かれている。

(3) だが、その自信たっぷりの考え方、行動のせいで、ある時には、無意識のうちに人を傷つけたり、不幸に陥れることになる。さらに不幸なことに、このことに本人は全く気づいてないし、気づくこともなかったりする。

これらの特徴は、それぞれの作品のテーマと有機的に結びつき、老舍独特の問題提起の仕方がなされている。そして、ここから読者に人間の弱点やら、社会の様々な問題を考えさせることになる。

これ以後の『小坡的生日』(1930年)『猫城記』

平成6年10月18日受理
総合教育センター 助教授

(1932年)の作品では、初期の三作品にみられる傾向は影を潜める^(註6)。

そして、この『離婚』という作品で再び「ユーモアに帰る」と、作者が自ら言うのである。

このような点を踏まえ、もしこの『離婚』も「ユーモア」作品だとすれば、この作品にも初期の三作品にみられるような特徴があるのか。また、この『離婚』の「ユーモア」表現の中心は張大哥であると思われるが、前作品の成果が、この作品にどのように生かされているか。そして、これらを手がかりに、さらに、この作品のテーマも考えてみたい。

—

まず最初に、この作品で最もユーモラスに描かれている、主人公でもある張大哥の描き方について見ていく。

① 張大哥の世界

この『離婚』の物語は次の言葉で始まる。

張大哥は一切の人の大哥である。彼のお父さんでも彼のことを大哥と呼ばねばならない思えるほど、彼の大哥の雰囲気は十分なのである^(註7)。

この「大哥」というのは、兄貴の意味である。だが、この作品での「大哥」という言葉は、実の兄貴というより、彼が頼りがいがある、面倒見がよい、いつも人のために一肌脱ぐという人物であるということを表しているのである。

そして、この文にすぐ、

張大哥が一生の内に完成させようとしている神聖な使命は、結婚相手の紹介と離婚に反対することである^(註8)。

が続く。

そしてこの文章に引き続き、張大哥の、男性

と女性を上手に結び付けるコツ、またこれに対する自信がユーモラスに紹介されている。つまり、このような張大哥の「大哥」としての頼りがい、面倒見の良さ、人のために一肌脱ぐ性格が最も華々しく発揮されるのが、男性と女性を結び付けるというケースにおいてであるとながって行くのである。

張大哥に対する、これらの記述を検討すると、次の二つの傾向を見いだせるように思われる。

張大哥は非常に面倒味がよいのであるから、当然ながら、人との付き合いも多くなる。人との付き合いが多ければ、いろんな人から相談を持ちかけられる。この相談に乗ってやることによって知り合いがまたどんどん増えていく。知り合いが増えれば当然ながら、いろんなところに顔がきくという結果を生み出すことになる。そしてそれがさらには、結婚を取り持つてやることにもつながっていくのである。これがひとつである。

また、張大哥の性格から、すぐ男女を結び付けたがる、人と人の和を大事にするということから、対立争いを好まない、すべてを丸く収めようとする傾向を指摘することができる。

ともあれ、張大哥のやり方には悪意はない。自分が相手の面倒をみることによって金を儲けようとか、人を陥れようとかの気持ちはない。あくまで彼のやり方は『人情』に基づくものである。

例えば、老李が悩んでいる様子が見えれば、自分の家に呼び、一緒に食事をし、話を聞き、必要なら相談に乗ってやる。また、老李の家族が北京に来ることになれば、老李一家のために住まいを探してやったり、必要なものを揃えてやったり、家が傷んでいれば修理の手配をしてやったりする。友だちのために一生懸命に骨を折り、そこから何か報酬を求めるといったことはしないのである。本当に頼りがいのある、良い人なのである。

しかし、確かに張大哥は『人情』があり、老若男女、すべての人から好かれ、頼りにもされ

ている。が、張大哥が彼流のやり方で知人のために一肌脱ごうとすれば、それによって何も問題は生じないか。このことについて、以下のような場面を設け、張大哥のやり方の欠点を描き出す。

② 張大哥の知人である医者救出法

かつて結婚の世話をした娘さんが張大哥のところにやって来る。そうして医者である夫が治療を誤ったため患者を死なせてしまい警察に捕まってしまったので、どうかして欲しいと張大哥に訴える。

張大哥は彼女の話聞いて、警察に自分の知り合いがいるので、その知り合いを通じて、その娘の夫を釈放してもらおうことにすると、娘に言うのである。

このやりとりを、たまたま張家に居て聞いていた老李は以下のような感想を抱く。

彼（老李）は張大哥に感心すべきか、恨むべきか解らなかつた。人を助ける熱い心という点で言えば、張大哥には確かに取るべきものがある。彼（張大哥）のやり方から言えば、彼は確かに憎むべきである。続けて考えた、この社会において、この憎むべき方法は恐らく最も良いものである。しかし、この目前をごまかすやり方は——善意ではあるけれど——社会の暗黒を保持し続けるだけのようなものであり、しかも人々を社会の暗黒の中で喜んで生活させることになり、たまたま光明があったとしても、人々は依然として目を閉じ、受けつけようとしなくなるだろう^(註9)。（注：カッコ内は筆者）

その女性の夫を助けるのは『人情』に基づくものであり、それはそれで立派な行為と言うことができる。しかし、いかに『人情』からとはいえ、誤って人を殺した人物を、かつて結婚を世話してやった公安に居る知人を使って救い出すのは、明らかに違法行為であり、社会の暗黒

を増す行為につながる。

張大哥は善人である。いつも人のために一肌脱いでくれる。しかしこの場合には、彼が人が良ければ良いほど、人を助けようとするほど、一方では社会は悪くなっていくという皮肉な構造が明らかになっているように思う。

しかし、頭では解っていても拒絶は容易ではない。人から頼まれ「便宜」をはかってやる行為は悪い。だが、何と頼まれようと犯罪行為だとし、冷静に相手の依頼を拒絶できるか。これも決して容易なことではない。当然ながら、拒絶すれば人から「大哥」と呼ばれることもなくなる。張大哥の批判は、このあたりの微妙なところまで含めて問題にしているのである。

さらにここで注意して置かねばならないのは、この作品の背景になっている社会に、張大哥の生き方を受け入れる素地があるということである。張大哥のやり方が、その社会に、人々に歓迎されており、しかもこのやり方は、この社会で暮らすには非常に便利なのである。

③ 張大哥の場のとりつくり方

この他にも、また、張大哥のやり方が、人を不幸にすることがある。以下の場面にそれがある。

老李が役所の同僚に黙って妻や子供を北京に連れてきたことを詫げるため、同僚たちに食事をご馳走する場面がある。この会はもともと奥様方は招待せず、男たちだけの会であるはずだった。ところが、役所の同僚で小悪党の小趙が老李の奥さんを騙して、奥さんと子供を宴席に連れてくるのである。ところが、奥さんは田舎から出てきたばかりで洋食のマナーなども知らない。しかも、子供たちは子供たちで大騒ぎするということもあり、老李も彼の奥さんもすっかりみんなの曝しものになり、恥をかいてしまう。

この事件に関して、老李は以下のように張大哥を責めるのである。

老李は小趙に対する恨みは張大哥への恨みほど深くはなかった。小趙に対しては、自分がどうしてその場で小趙をやっつけられなかったのかを恨み、いささか教訓を得た。張大哥に対しては、どうしようもなかった。今回の悪ふざけで、勝利者の第一位は小趙であり、第二番目は張大哥である。確かに張大哥は細心周到に、しばしば李の奥さんのために囲みを解いてあげたが、その実しばしば小趙のために悪ふざけを完成してやっていたのである。どうして張大哥は直接小趙を阻止しようとしなかったのか？ どうしてその場で私や妻を励まし小趙と目には目を、齒には齒の行為に及ぶようにしなかったのか？ 張大哥がそんなことをするはずがない！ 彼は小趙の行為は正ししと認めている、たとえ完全に妥当ではないにしろ。彼は李の奥さんはからかわれるべきだと認めている、しかし余り度を過ぎない程度に^(註10)。

張大哥は人情から李の奥さんをかばい、その場を丸く収めようとする。この点においては、張大哥は決して悪い人物ではない。むしろ善良な人間である。

にもかかわらず、老李は直接悪さをした小趙よりもっと恨んでいる。というのは、張大哥自身は意識しているわけではないが、彼の行為は、李の奥さんを助けてやっているように見えながら、実は小趙の行為を正当化し、完成させてやっていると指摘している。

このケースでは、場をとりつくろってはいけないのである。

小趙が李の奥さんをからかう。それが何度も続けば、李の奥さん、或いは老李自身も激しい反撃に出る可能性がある。罵り合いかも知れないし、或いは殴り合いかも知れない。老李の論法だとこれが必要だとなる。悪い人物に対しては徹底的に憎む、激しく攻撃することが必要だの考えがある。決着をつけなければいけないのである。にもかかわらず、なまじその場を丸く

収めてしまうと、小趙に対する反撃がそがれることになってしまう。その結果、最も得をするのは、小趙だとしているのである。

ある時には、場合によっても最も人間的で、貴重である「人情」とか「同情」というものの否定である。

④ まとめ

このような描き方、問題の提起の仕方は、明らかに『老張的哲学』『趙子曰』『二馬』にみられる手法である。

つまり、

- (1) 張大哥は、すべての人の「大哥」である。頼りがいがあって、面倒見が良く、いろんな世話をしてくれる。「人情」に厚いということになるうか。このような性格がユーモラスに描かれ「善人」であることが示される。
- (2) 張大哥は誰に対しても、どのような件に就いても、「人情」でものを解決しようとする。
- (3) しかし、誰に対しても「大哥」であることが、つまり「人情」に厚いということが、時には社会を悪くしたり、悪い人物を保護するということになりかねないことを指摘する。

となる。

本来「善人」であるはずの人物が時と場合に応じて、社会を悪くしたり、人間を不幸にしたりすることがある、ことが明らかにされている。これも人間が持っている普遍的な欠点抉り出しているといえるかも知れない。

この張大哥のような人物が社会を構成しており、たとえ社会が腐敗したとしても、それに対する不満もやんわりと包み込み、ずーっと変わることなく、その社会を存続させているのである。

二

この作品には、もう一方の主人公、老李という人物がいる。老李は自分の家族を故郷に残し、自分だけが北京で暮らしている。いわば、独身のような生活をしている。この設定からも解るように老李はまだ「現実」を知らない、或いは「現実」に染まってない純粋な若者といえるような位置にある。この作品で、つまり今回初めて家族を呼び寄せ、北京で生活することになる。

張大哥との関係で言えば、この老李は意図的に張大哥の対極に置かれている。

張大哥は「現実」の世界で生きているのに対して、老李は「詩意」と称する世界の中で生きることを理想とするのである。

このことから、まず、この物語は老李の「詩意」と張大哥の「現実」が対比され、そこから「現実」の問題が考えられていると言えそうである。なお、「現実」とは、張大哥が住んでいる実際の社会であり、張大哥のような人物たちが構成している役所、家庭といったものを含んで成り立っているものである。

① 老李の世界

では、老李の言う「詩意」とは何か。

「私が追究したいと思っているのは——詩意なのだ。家庭、社会、国家、世界すべて現実足に足を降ろしており、すべてに詩意がない。大多数の婦人は——既婚の人も未婚の人も含まれるが——平凡である。あるいは男性たちよりもっと平凡かもしれない。私が欲しいのは——たとえちょっと見るだけでも良いのだが、一人のまだ現実に汚されてない女性なのだ。情熱は一首の詩のようであり、楽しさは音楽のようであり、貞淑純潔さは天使のようである、そんな女性である。私はおそらくすこし狂っているのかもれない。この狂気は、もし私が自分を認識できているとしての話だが、勝手気ままをする勇気がないのに夢

のような考えを願い、社会の暗黒を見てたどころに平和になることを望み、人生の宿命を知れば永遠に生存する楽園を想像し、自分では迷信を禁じながら神秘を願う、私の狂気はこれらのうまく形容できないようなもので組み合わせられている。きみはもしかしたら、たわごとと思うかも知れないが。」^(#11)

「詩意」は作品の後の部分でも触れられているが、もうひとつ具体的ではない。敢えて述べれば「現実に脚を下ろして」ない、「現実に汚されてない女性」のようなものようである。そしてイメージとしては、美しい詩、楽しい音楽、汚されてない女性、或いはひとつの理想的なもの、例えば理想的な社会、場所、人ということもできそうである。さらに、この「詩意」は、一種の虫の良さ、わがままともいえる「狂気」に支えられているという。

しかし、このような言葉で張大哥を納得させることはできない。「詩意」は、確かにあるにはあるが、他の人に具体的に述べることができない。だから、相手を納得させることもできない。

老李の「詩意」に対し、張大哥の「現実」は実に説得力がある。

張大哥は言う。田舎に奥さんがいて、子どもがいるのだから、彼らを北京に呼び、食べさせたり、教育したりしなければならない。これは人間としての義務であり、責任である。これを放棄しても良いのか。張大哥は老李にこう迫ったのである。老李もこれに首を振ることはできなかった^(#12)。

だからといって、「詩意」を捨て完全に「現実」の中で生きることも承知することはできない。しかし、自分自身がどのようなものか解らないし、また、どうしたら良いか解らない。

詩意であれ、現実であれ、彼は張大哥に負けた。負けた原因は、思想上にあるのではなく、また話し方にあるのでもなく、彼自身自分を正確に理解できないというところにあっ

た。このことが彼に自分にはなんら価値がなく、重さのないものと思わせたのである。哲学者であるべきであり、革命家であるべきだ。しかしどうもはっきりしない。小官僚であるべきではなく、おとなしい家長であるべきではない。しかしどうもはっきりしない。結局、——ああ、結局なんてないんだ、一切がはっきりしなのだから。^(註13)

思い切って哲学者・革命家になって「現実」を変える方向に進めば良い。しかし、そのようにも踏み切れない。小官僚・おとなしい家長となるべきではない。しかし「現実」からみれば、そうならざるをえない。この心の動きが、おそらく最も一般的な人間のそれであろう。

彼は考えるたびに、行動するたびに、注釈を加えなければならない。落後しないように。しかし同時にまた問おうとする。これが正しいのかどうか？ 何を基準に正しいか正しくないのかを決めるのだろうか？ 依然として「詩に云う」「子曰く」だろうか？ 彼の行為は——良心に合う——必ず新思想に対して謝らなければならない。彼の思想は——時代に合う——必ずあの幽霊の影に謝らなければならない。生命は二面的で、まさしく彼の妻のあの纏足を解いた歩行不自由な脚のようなものだ。^(註14)

「新しい思想」と「古い思想」そして「頭で考えていること」と「実際の行動」がある。

人間は「頭の中で考えること」と「実際の行為」とは違う場合がある。「頭で考えている」ままに「実際に行動」すれば、葛藤はない。だが、いろんな事情から実際にはすべてそういうふうにはできない。

「頭の中」では「新しい思想」を理解できる。しかし、「良心」に従えば、とても「新しい思想」の通りに「行動」はできない。だから、結局その「行動」は「新しい思想」に対しては恥ずか

しいものとなる。

「良心」という言葉から推測するに、どうして「行為」できないかということ、もしそのように「行為」したならば、時には、場合によっては何か人間であることの大事なものが抜け落ちるのでないかの不安があるからである。老李は、まさしくこの揺れの中で生きている。

ここまでですでに明らかなように、老李は「詩意」を得たい、「詩意」の中で生きたいと思っただけではなく、まだ「現実」の中で躊躇している人物であるということが出来る。

そこで、以下に老李が「詩意」を否定し「現実」へと心が動く際の根拠、また逆に「現実」から「詩意」へ心が動く際の論拠などを簡単に整理してみたい。

② 「詩意」から「現実」へ

先に上げた張大哥の指摘のように、やはり妻、子供はちゃんと食わせ、ちゃんと教育するのが夫、父親としての義務であり、責任である。これを認めれば、「詩意」をあきらめなければならない。

また、いくら「詩意」と言ったところで、「現実」のところでは人間は食べなければならない。この食べるということのために一生懸命に仕事をしているのではないか。戦いまでしているのではないか。これが「現実」である。

これが生命なんだ。食べる。何でも食べる。人間は確かにパンの為に生きているのだ。パンの不平等は根本的な不平等である。何が詩意だ、笑わせるな！ 自分のパンを守るために他人を飢えさせることや、パンのために戦争をすることは必要なことである。西四牌楼は世界のひな型なのだ。あの多くの男女は皆この場所を知っており、本当に生きている。他でもなく、腹のために生きているのだ。張大哥は正しい。^(註15)

ともかく人間は食わなければならない。これ

は間違いなく真理であろう。これが「現実」を支えている真理である。

これらの「現実」を目の当たりにし、老李は奥さんと子供二人を北京に呼び寄せ、一緒に住む決心をする。

また、家族を呼び寄せ生活すれば、生活する道具も買わなければならないし、食べるものも必要である。今まで経験しなかったこのような体験も、一種の喜びをもたらす。

老李の心は、たった今せいろから出した包子より熱かった。家庭の快樂は家庭の内に留まるものではない。家庭は快樂のラジオであり、ここから流れる音楽や出来事は、北平より南アメリカまで伝えられる。張大哥の喜びもうらやましくはない！^(註16)

或いは、

彼は生活が素晴らしいものであると感じた、アパートでは挨拶をしてくれるおばさんはいない。アパートは商売であって、この借家には人情がある。^(註17)

実際に暮らしてみると、それなりの「現実」からもたらされる喜びもある。

しかも一緒に生活すると子供もかわいくなってくる。

だが家庭はいちおう満足のいくものであるにしても、老李からすれば、役所はどうしようもなく腐敗しており、嫌悪すべきものなのである。

この場合、役所は腐敗していても、妻や子供と一緒に暮らす喜びを維持しようとすれば、その腐敗した役所に務め続けなければならない。そうすればやがて、腐敗に目をつぶるか、進んで腐敗に加担するか迫られることも、或いは起こるかもしれない。つまり、人間としての、家族に対する義務、責任を果たそうとした途端、腐敗した役所に妥協する道を歩き始めねばならず、ついには、その役所の組織にしっかり組み

込まれてしまうことがあるかもしれないのである。

こういうものを含めた「現実」に、老李は、妥協しない。現状の役所、家庭を認めることをしない。これは同時に「詩意」を捨てないということでもある。だから心が揺れるのである。

このように考えると「詩意」を捨てないのは、良識ある人間であることをやめないことと同じだということになる。

③ 「現実」から「詩意」へ

では「現実」から抜け出し「詩意」に行くためにはどうすればよいか。

「現実」といっても、この作品で主に描かれているのは、老李、張大哥の務める役所であり、それぞれの家庭である。老李は役所に対しては絶望的な印象を持っている。家庭に対しては、「詩意」に基づく理想的な形があり、時には嫌悪感を持ち、時には満足する。

この「詩意」への「あこがれ」が、亭主が自由な人で、別の女性と家を出て、一人残され、夫のお母さんと一緒に暮らしている隣の馬さんところの若嫁を「慕う」という形で表される。その女性は「詩意」の世界の理想的な女性に近い。だから、できるならその女性と一緒に暮らしたいと思う。

この考えは「常識」では不謹慎な考えであり、実際に実行に移すとすれば不道德のように思える。しかも、もしその女性と一緒にすることにならば妻、子どもは路頭に迷ってしまうのではないか。このような考え方はしないのである。そもそも不謹慎、不道德などが問題にならないところが「詩意」の世界なのである。

この考えは、作品で一貫している。作品のほぼ終末に近い第二十に、以下のような言葉がある。

老李は彼女と一緒に逃げる事ができる。このひどい家庭を逃げ出そう、あの怪物の役所を逃げ出そう、逃げ出していい香りが立ち

こめ色鮮やかな南洋に行き、素っ裸で赤道のあたりのジャングルでぐっすり眠り、いろんな色の夢を見よう。丁二爺は連れて行こう。^(#18)

もちろんこの言葉が発されるのは、隣の若嫁の主人の馬さんが、見知らぬ女性を連れて帰ってきたのに、結局、その馬さんの若嫁が、馬さんに妥協しようとするさし迫った場面ではあるが、連れて逃げていく人の中に、家族はいない。子供さえもない。「詩意」に踏み出した途端、家族も家庭もなくなる。或いは人間の「情」を「現実」として切り捨てるところにしか「詩意」はないといえるかもしれない。

もし妻、子供、これに対する愛情、或いは義務、責任を言い出せば、たちまち「詩意」は不可能となり、結局は「現実」に住み続けるしかない。

「詩意」の追究にはまさしくこのような一面があることがわかる。

④ まとめ

この作品には「現実」と「詩意」の対比が中心に据えられ、なぜ「現実」がこのままなのか、「現実」を変えるにはどうしたらよいかという問いかけが、作品の中で行われていると考えられる。

作品の「詩意」は確かに漠然としており明確ではない。しかし、確かに人間誰しも頭の中にはこのようなものがあるように思える。

ではこの時、なぜ「現実」から「詩意」に突き進めないのか。これは同時に一方ではなぜ「現実」が変革されることなく連綿と続いてきたのかを考えることでもある。

それは、「現実」の役所、家庭の存在が、人間としての「情」、つまり「人情」と巧妙に結びついており、まっとうな人間であろうとすればするほど「現実」の役所、家庭を保持する方向に向かって行くからではないか。

たとえ親に決められ結婚して作り上げた家庭

でも、一緒に生活すれば「情」も沸く。まして子供も生まれれば、やはりかわいくなる。

このような気持から、或いは、また、人間としての義務、責任ということから家庭を守ろうとすれば腐敗した役所も保持されてしまう。「現実」が変わらないのは、まさしく、このような理由からである。

では、「現実」を否定し「詩意」へ移行させるためにはどうするか。

このためには根本にあるところの「人情」を切らなければならない。しかし、「人情」を切るのとは簡単でない。「人情」を切ってしまったら、文字どおり人間ではなくなるのではないか。この恐れから容易に踏み切れないのである。

ここで明らかになっているのは、「詩意」の追求が、家庭、親子にたいする人間の「情」、或いは人間の義務・責任のようなものとは反対の方向を向いているものであるということである。

このどちらを選択するか。これは簡単ではない。いわば我々人間に課された永遠のテーマでもあるような気がする。もちろん、心が揺れたり、悩んだりするのは、そのどちらも重要だと認め、捨てたくないと思うからである。だから、いつか、どこかで決着をつけたいと思いつつ、どうしても決着を着けられない。これは矛盾している。だが、この矛盾した心の状態にいたることが、実は最も人間らしい人間である証拠かもしれない。

作品でも、実際に自分の理想とするやり方で突き進むような馬さんを登場させている。しかし、老李は彼のやり方が母親を悲しませるという理由で否定している^(#19)。「情」を取るか「詩意」を取るかの、このようなもうひとつ別のケースも示めされている。

或いはもしかしたら「人情」を失わず、かつ「詩意」へ移行する第三の道はないのか。作品では、いろんなケースを登場させることで、この模索が行われているようにもみえる。

三

この作品は二十章に分かれるが、「第十一」の最後の「天真が警察に捕まえられて行かれた」^(註20)という言葉で、「第十二」から新たな展開が始まる^(註21)。

天真、つまり張大哥の一人息子が、共産党であるという嫌疑で警察に捕らえられ連れて行かれたのである。息子が捕らえられ、役所に行かず、悲しみに打ちひしがれる張大哥を見て、老李は「人情」から天真を助ける努力を始める。

老李はもちろん、具体的な方法を持っているわけではなく、最初は署名運動で救出を図ろうとする。だが、なにぶん共産党に関わるのだから役所の誰もこれに協力しようとしな。そこで窮した老李は、情報通で、各方面に「コネ」を持つ小趙に天真の救出を頼むことになる^(註22)。

つまり、天真が警察に捕らえられる事件を境にし、老李と張大哥を中心に進行してきたストーリーの展開が、老李と小趙との対決という形で動き始める。したがって作品の後半は、いつ、どのような形で天真が助けられるかという興味が読者を引っ張っていくことになる。物語は、大筋では善玉と悪玉がいて、悪玉が善玉をさんざんいびり、困らせ、結局は悪玉が善玉にやつつけられるという、いわばハッピーエンドの形式である^(註23)。

① 小趙の世界

まず小趙と老李の関係から小趙の世界を明らかにする。

小趙は老李を嫌っている。なぜか。これは以下の小趙と所長夫人のやり取りの中からそれを窺い知ることができるように思われる。

小趙が所長の奥さんと老李をどのようにするかについて話し合った——それは一回だけではなかった。老李は小趙を陥れるようなことはしてない、だから小趙は老李を陥れようとしているのである。小趙は所長の奥さん

にこんなふうに行った「老李のヤツは、所長が仕事を引き継ぐときに免職にならなかった。だが、あいつはあくまで所長と何の関係もないと言っている、こんなこと誰が信じられるか！ 私たちの手の中には三百人余りおり、役所にもぐりこめないでいる、あいつと所長が関係がない、少しの関係もないなんて！ 以前所長が彼を選んで重要な公務をやらせている。それをわたしと秘書さえも知らないことだった。早くヤツを始末しないと、とんでもないことになります。彼を始末しなさい！ あいつは今病気です。所長に言って、やめさせるのです！」^(註24)

小趙の考える役所と言うのは、「運動」して入るのが当たり前で、所長が代われれば当然ながらその配下にいた人々も当然止めさせられる、こんなところなのである。所長と役人は「コネ」という関係で密接に結びついている。したがってまた、役所にも、専門的知識を持っており、仕事ができる有能な人物というものはもともと存在しないのであって、どれだけ「コネ」を持っているか、運動したかで役人であるかないかが決まるのである。

そうして小趙が選択した方法は、所長夫人に取り入ることである。その方から所長に圧力を加え、役所で影響力を持つというものである。だから、小趙は役所の科員ではあるが、役所の仕事はしない。するのは、所長夫人の私的な仕事をするだけである。役所の仕事はやってもやらなくても同じだが、夫人の仕事にはやったらやっただけのメリットがある。

これが、小趙の世界であり、老李のそれとは根本的に違っているのである。もちろん老李は「コネ」とか運動とかに興味はない。だから、小趙は嫌うのである。「コネ」や運動などに熱心ではないくせに、役人として役所にいる老李が気に食わないのである。いやそれ以上に、老李の存在は突き詰めれば小趙の世界の否定でも有り得る。だから小趙は恐れているのである。

老李も小趙がなぜ自分を嫌っているのかに気づいている。だが、老李は敵対の気持ちは持たない。

「老李おまえが、完全に張大哥になりきらないからにちがいない。だから、小趙はおまえを目の仇にするんだ。でも、たとえそうだとしても、つまらないことだ。」^(註25)

② 小趙と張大哥との類似と相違

張大哥と小趙の世界は、老李の世界に対立するという点からみれば、同じようにも見える。

小趙も張大哥と同じように「コネ」があり、実際の生活の場で、役所でこれを有効に使って生きようとする。この部分においては、小趙の世界は基本的には張大哥のそれと同じである。

まず、違っているのは「コネ」の力の差であろう。これに関して、張大哥は自ら以下のように述べる。

小趙は天真がどこに閉じこめられているか私には教えない。年を取ってしまった。新しい機関のことは、ぜんぜん解らない。もし息子が公安に捕まったんだったら、とっくに出してやっているのに。わたしはいつもあらゆることに方法があると思っていた。なんとわたしはおいぼれ熊になってしまった。あたらしい道具は使えない!^(註26)

張大哥と小趙は世代が違う。時代の変化にともない張大哥の「コネ」の力が及ばないところが出てきたのである。

さらに大きく違うのは、張大哥は「人情」が基盤にあるが、小趙にはないということであろう。むしろ小趙は、このような「コネ」を利用して、その見返りとして個人的な利益や社会的地位を求める。野心もある。

だが、考えてみると、張大哥のやり方は、容易に小趙のやり方に移行する可能性を含んでいる。小趙の場合、「コネ」を使う動機である張大

哥の「人情」が、個人の利益・地位に置き換えられているだけである。

したがって、根本的な解決という点では、単に小趙をやっつければ社会が良くなるというだけのものではない。まず張大哥や小趙のような人物を生み出す何か、張大哥や小趙のような人物を含めて成り立っている社会をどうにかしなければならぬ。

『老張の哲学』に非常に人の良い孫八という人物を評した以下のような文章がある。

世の中に青い鬼がいるのは怖くない。ただ黄色い顔をしたお人好しがいるのが怖い。というのは彼らは悪い鬼の召使いになれるし、なることも平気だ。悪い鬼の指図を聞き、自覚せずして悪い鬼の勢力を拡大する。社会が永遠に清くならないのは、決して悪い鬼が悪いことをするからではなく、お人好しが醉生夢死の状態でめちやくちやにかき乱すからである。悪い鬼は刀や鉄砲で追い出すことができるが、お人好しは形跡を踏さず樹の根っこの下で穴にもぐり込んでいる。^(註27)

この作品から作者の関心は一貫していると思われる。つまり最も恐ろしいのは小趙ではなく、実は張大哥である。本当に悪いやつであれば、やっつけてしまえば良い。しかし、とても良い人で、悪いことをしても気づかず悪いことをしているという人物の場合そうはいかない。

その張大哥を、老李は助けようとしているのである。これは明らかに作品作りと矛盾しているように見える。

このことに作者も気づいている。どうして張大哥を助けて天真を救い出すのかという自問自答で、「人情、人情だ、張大哥は結局のところ悪い人間ではない」^(註28) (十二・二) という結論を出している。これは困っている人間としての張大哥のために一肌脱ぐことであり、決して張大哥の世界を支持していることでないことを表明しているものであると取りたい。

四

最後に、この作品の結末の描き方を検討することで、作者の姿勢のようなものを見てみたい。

① 張大哥の世界

最後に天真は助け出される。天真が助け出されると、張大哥はさっそく知り合いを招待し、お祝いの会を開く。その行為も衝撃的であるが、もっと衝撃的なのは、あれほど苦しめられ、家作をまきあげられたり、娘を要求されたりして、怨んでいたはずの小趙の名前を、張大哥が招待客の、なかでも重要な恩人として真っ先に挙げるということである^(註29)。これほどの目に合いながら、それでも張大哥の生き方はなんら変化していなかったのである。

また、小趙の方は殺されてしまう。ただ、小趙の死で注意したいのは、小趙が殺された後の役所であり、家庭であり、社会である。小趙が殺されたことでなんら変化したものはないのである^(註30)。

そして張大哥は復活し、「コネ」を使って役所に返り咲く。しかも、どこでも好きな部署に行っても良いという「お達し」までもらった^(註31)。

これらは張大哥的世界が健在なままであることを表している。張大哥の世界が健在であるということは同時に、小趙のような人物を生み出す基礎もまた健在であるということでもある。

ハッピーエンドの終わり方にもかかわらず、ある種のうすら寒さを感じさせて終わるのは、このような最後の描き方にあるように思う。

② 老李の世界

また、「詩意」の世界であるが、「詩意」のシンボルとして存在した隣の馬さんの若嫁は、結局、馬さんと元の関係に戻っていく。この場面に直面して、老李は以下のように述べる。

老李は彼女に替わって彼女の将来を考えた。高同志は必ず帰ってくる。馬家の若嫁は

夫に投降したのだから、次には高同志にも投降するはずである。そうしてさらに馬家の若嫁は家から追い出されることになるだろう。彼はひとつの新鮮な花が次第に花びらを落としていき、やがて葉っぱさえも残らず落としてしまうのを見ていた。彼女を恨むべきか、憐れむべきか。老李には決定できなかった。世界は実際のものであり、永遠に咲き続ける花などないのである。詩の中の花など幻想に過ぎないのである^(註32)。

前掲の感想を抱き、北京の生活に見切りをつけ、そうして、家族と、小趙を殺し張大哥一家を救った丁二爺という人物を連れて、故郷に帰って行くのである。

いったん「現実」の世界に妥協すれば、次から次に妥協しなければならなくなる。一つの妥協が新たな妥協を生み出す。そしてやがて、「現実」にしっかり組み込まれ、身動きが取れなくなってしまふ。その結果、張大哥になるのである。作者は馬家の若嫁の「投降」でこのようなことを象徴的に暗示してると考えたい。いちばんこのようなことになるはずがないと思われた人物の「投降」であった。もちろん、この件に関しても、若嫁の馬さんのお母さんに対する「人情」が微妙に関わっているのである。

若嫁の「投降」をこのようなものと考え、老李が故郷に帰るという行動は、若嫁に対する絶望、同時にこの社会の「現実」の凄さに対する個人の無力を表現するものとして捉えられそうであるが、筆者は老李の行動を絶望、逃避というものではなく、むしろ「現実」に対する妥協を拒否する態度の表れであると考えたい。というのは、ストーリーの展開から考えると、最後の局面に到り、張大哥のような人物たちが作り上げている「現実」との妥協を拒否するための、実際に取り得る無力な個人の精一杯の行動は、やはり「現実」から脱出することしか、とりあえず考えられないからである。

また、老李は「詩意」を諦めたのかの問題で

あるが、若嫁を「詩意」のシンボルと見ると明らかにそれは壊れてしまった。しかし、故郷に帰るといふ選択そのものは、やはりイメージとしては「詩意」を捨てたということにはつながっていかないように思う。

「詩意」を捨てず、「現実」との妥協をも拒み続ける。そして、なおかつ家族を捨てることもしない。この時期の作者の取り得る、最も良心的な選択はこのようなものであったのである。

おわりに

『離婚』という作品を、先行作品の分析の結果を手がかりに（或いは「ユーモア」という視点からとも言えるかもしれないが）、見てみた。そうすると、人間のやさしさ、思いやり或いは人間としての義務とか責任とかといったものと社会或いは家庭といったもののつながり、または、家庭というものと社会というもののつながり、このようなものが漠然とではあるが、見えてくるのである。この作品では社会が腐敗して我慢ができないものであったり、家庭に不満があったりした場合であるが、そういったものに、我々がどのように対処すべきか問われている。このことについては、本論ですでに述べた。この点も含めて、おおもとの社会がいったん悪くなってしまうと、対処に如何に苦しいものを要求されるかを作品から思い知らされるのである。

今回は論じ残した部分もある。丁二爺についてもそのひとつである。「やさしい」「おとなしい」ということで不幸になったというのであるが、この仕立てにも興味が引かれる。また、最後に彼が小趙を殺すのであるが、何故殺さなければいけないのか、どうして彼でなければいけないのか。このようなことも論じてはいない。また、この作品に登場する女性についても、ほとんど述べてない。さらにこういうものも含めて考え続けてみたい。(完)

注

今回のテキストは『老舎文集2』に収められている『離婚』を使った。ただこの本と初版本には文字の異同がある。しかし、幸いに『老舎小説全集 第3巻』が手に入り、この本は初版本と同じであった。このようなテキスト間の文字の異同については『老舎小説全集1 張さんの哲学 離婚』(学研)の、日下恒夫氏の「解説」に詳しい。

日本語の翻訳で容易に見れるものに、前掲のものとして『中国現代文学選集6 老舎・曹禺集』があり、前者が竹中伸で後者が伊藤敬一氏が訳されている。今回参照させていただいた。

(1) 『離婚』の中国での出版状況は以下の通りである。

上海 良友図書印刷公司、1933年8月初版、1933年12月再版、1935年5月3版、1940年普及本再版、1945年5月4版

上海 晨光 1947年9月初版、1948年改訂本再版、1949年3月改訂本3版、1952年修訂重排初版、1952年7月修訂重排再版、1953年5月修訂重排5版、1953年修訂重排5版、1953年修訂重排7版

人民文学出版社 1963年4月初版

重慶 南方印書館、1943年4月

注；本条転録自《武漢地区七単位中国現代文学作家著作連合目録 1918-1963. 12》(湖北省図書館等編 1964年10月)

〔『首都図書館編 老舎研究資料編目 北京市図書館学会』(采華書林 1983, 6, 10)より引用〕

(2) 「我怎么写《离婚》」はもともと『宇宙風』第7期(1935年12月)という雑誌に掲載されたものである。今回は『老舎研究資料』(北京十月文芸出版社)のものを使用した。

(3) 「我怎么写《离婚》」に以下のような文章がある。「在没想起任何事情之前，我先决定了：这次要“返归干幽默”」(あらゆることを考える前に、私はまず決めた、今回は「ユーモアに帰る」と。)

(4) 『老張の哲学』『趙子曰』については以下の論文を参照されたい。

○拙論「老舎『老張の哲学』私論」(集刊東洋学57)

○拙論「老舎『趙子曰』試論」(八戸工業大学紀要第9)

(5) 『二馬』については以下の論文を参照されたい。

○拙論「老舎『二馬』試論」(八戸工業大学紀要第10)

(6) 『小坡の生日』『猫城記』については以下の論文を参照されたい。

○拙論「老舎『小坡の生日』試論」(八戸工業大学紀要第11)

○拙論「老舎『猫城記』試論」（八戸工業大学紀要第12）

- (7) 『離婚』第一・一 p. 149.
- (8) 同上
- (9) 『離婚』第二・二 p. 163.
- (10) 『離婚』第八・四 p. 233.
- (11) 『離婚』第二・二 p. 165.
- (12) 同上 p. 167.
- (13) 『離婚』第二・四 p. 173.
- (14) 同上 p. 175.
- (15) 『離婚』第三・一 p. 178.
- (16) 『離婚』第四・三 p. 190.
- (17) 同上 p. 191.
- (18) 『離婚』第二十・一 p. 360.
- (19) 「結果がもし年取った母親を悲しませるものであれば、なおさらすることはできない」（『離婚』第二十五・五 p. 366.）
- (20) 『離婚』第十一・四 p. 269.
- (21) 途中から新たな展開というか、作品の雰囲気が変わるような構成をしている先行作品に『小坡の生日』がある。後半は「夢の世界」になり、ほとんど作品の終わりまで、それが続く。一つのテーマを違った角度で描き出そうとする試みであると思う。詳しくは（注3）の論文を参照してもらいたい。
- (22) 『離婚』第十二・三.
- (23) このような作品の作り方は、先行作品である『趙子曰』を想起させる。『趙子曰』の悪玉は欧陽天風という人物であり、この作品では小趙と
- なる。前者の善玉は李景純という人物で、後者が老李ということになる。もちろん描こうとしている局面は違うが、基本的構図は同じであるように思う。
- また、悪玉が偽の情報を流すことで人を操り、善玉を追い込み苦しめるという、この作品の後半にみられる形も『趙子曰』にある。この作品では小趙が呉の奥さんを操り、老李の家に老李を罵りに行かせたり、役所に老李の悪口を言いに行かせたりする。もちろん小趙から流された情報は事実無根であるが、これにより、老李の奥さんは動揺し、家庭騒動が引き起こされる。なお『趙子曰』については（注4）の論文を参照されたい。
- (24) 『離婚』第十一・三 p. 226.
- (25) 『離婚』第十四・四 p. 299.
- (26) 『離婚』第十四・二 p. 295.
- (27) 『老舎文集1』の『老張の哲学』第二十八 p. 131.
- (28) 『離婚』第十二・二 p. 274.
- (29) 『離婚』第十八・五 p. 344.
- (30) 『離婚』第十九・第二十.
- (31) 『離婚』第十九・三 p. 357.
- (32) この文章は『老舎文集2』の『離婚』には全くなく、『老舎小説全集第3巻』の『離婚』第二十・五 p. 385 にある。
文字の異同については、内容のとの関わりから改めて述べる必要があると思っている。